

2019年度 報告書

2020年2月5日(Wed.) → 2月14日(Fri.)

東京大学文学部冬期特別プログラム

Report on the Special Winter Program between the University of Tokyo Faculty of Letters
and the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, February 5-14, 2020



ストーンヘンジ



目次

1. 巻頭挨拶	
2020 冬の集いに寄せて	
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 大西 克也	2
Foreword to the Winter Program 2020	
Prof Simon Kaner	3
Executive Director and Head of Centre for Archaeology and Heritage Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures Norwich, UK	
2. ウィンタープログラムの概要	4
3. プログラム実施内容	5
4. 受講者レポート	
① Thematic Report	10
Alexandra Kelly [University of Southampton]	
Daniel Dodd [University of Liverpool]	
Erina Mameuda [University of Sheffield]	
Fruzsina Farkas [University of Southampton]	
Joseph Hatton [University of Liverpool]	
② 日誌形式レポート	14
③ テーマ別レポート	18
難波 陽菜 [文学部 3年]	
桐谷詩絵音 [文学部 4年]	
高石 桜 [教養学部 1年]	
清水 栞 [教養学部 2年]	
佐野 文哉 [法学部 4年]	
5. 総括	
イングランドの冬	
東京大学大学院人文社会系研究科・教授 佐藤 宏之	22

1 巻頭挨拶

2020 冬の集いに寄せて

本学文学部とイギリス・セインズベリー日本藝術研究所との学術交流協定に基づく本冬期特別プログラムが始まったのは2016年2月、今年で5回を数える。夏に東京の本郷キャンパスと北海道北見市の北海文化研究常呂実習施設を拠点に行われる夏期特別プログラムとペアとなる形で行われる。どちらも5名の本学学生とイギリス側の学生5名とが、約10日間寝食を共にしつつ学ぶもので、今回の冬期プログラムは従来とはやや構成を変更して、研究所所在地のノリッチではなく、ストーンヘンジ等の史跡が点在する南西部ウィルトシャー州を中心に行われた。双方のバランスを意識した組み立てとなっているが、唯一異なるのは、学生をもたないセインズベリー研究所が募集する学生はイギリスだけではなく、時に海を越えた大陸からも参加することであろう。

年少の頃より古代中国に沈潜することを好んだ私の欧州体験は遅く、貧しい。はじめてヨーロッパの地に足を踏み入れたのは、30歳を超えてからのことである。しかし初体験の印象は鮮烈だった。古代中国語に関するシンポジウムに招かれて訪れたチューリヒの街並みにたちまち魅了された。主催者のロバート・ガスマン

教授の計らいで、晚餐の席で披露された子供たちのバイオリン演奏はお世辞にも上手とは言えなかったが、生活に根付いた西洋音楽とはこういうものかと感慨深かった。たまたま立ち寄った骨董屋の女主人の気品のある物腰と笑顔は、今でも目に焼き付いている。石畳の街をそぞろ歩きながら、ふと脳裏に浮かんだのは、10数年前にこの風景と出会っていたら、自分は別の道に進んだのではないか、研究者になるなら西欧文化を専攻したのではなかったかということだった。

何かを選ぶことは、実は気づかぬうちに何かを捨てていることなのだ。自らが欲し、手に入れてきたものが多ければ多いほど、捨てていることに気づかぬものだ。しかし一つの選択という行為の背後には、数えきれない偶然と必然とが控えている。それらに導かれながらこの冬期特別プログラムを選択した皆さんの記録がこの冊子である。10日間の濃密な学習体験が凝縮されている。皆さんはこの先、幾つもの新たな選択を繰り返しつつ歩いて行くことだろう。行きつく先は様々だろうが、いつかこの記録を縁に、2020年2月にイギリスで10名が会し、同じ場で学んだ意義を振り返って欲しい。この冊子が一般の目に触れることはそれほど多くはないかもしれないが、しかし皆さんにとってかけがえのない宝になることを願っている。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

大西 克也



Foreword to the Winter Program 2020

The 5th Sainsbury Institute – Faculty of Letters, University of Tokyo Winter Program in British Archaeology and Cultural Heritage was another great success – despite some of the most severe storms of recent years (our day at Avebury at the height of Storm Ciara was especially memorable) and we felt that this year the students responded particularly well to the program and developed close bonds over the ten days they were together.

The Summer and Winter Programs, jointly run by the two institutions, are offering a very valuable introduction to cultural heritage in the two countries, along with expert insights into how cultural heritage is conceptualised and managed in Japan and England. At the same time, the programs provide a unique opportunity for students from the University of Tokyo and universities in the UK to spend an intensive period together, sharing experiences and bonding through a common appreciation of the importance of cultural heritage.

I am once again especially grateful to my colleagues at the Sainsbury Institute: this year Dr Andrew Hutchinson guided the group for the entire trip, assisted by Professor Uchiyama Junzo, Oscar Wrenn, and Dr Luke Edgington Brown. Hannah Stroud in Norwich worked hard in Norwich to ensure all the arrangements were as smooth as possible. I would also like to thank all the heritage professionals who gave their time to meet the students and explain how cultural heritage is managed in England. Thanks also to the staff from the Faculty of Letters at the

University of Tokyo who played such an important role in ensuring the success of the Program, in particular Professor Kunikita Dai who has been such a stalwart for all of the Summer and Winter Programs to date. We wish him every success in his move to Hokkaido University. For the first time this year we based ourselves mainly in one place, around the beautiful historic city of Salisbury. Sarum College, in the heart of the Cathedral Close, provided a wonderfully welcoming and understanding home for our stay, and I am tremendously grateful to the staff there for being so accommodating.

Exchange through cultural heritage offers wonderful opportunities to enhance mutual intercultural understanding on many levels. I am sure that all of the graduates of these Programs will find themselves in influential positions in whatever career they pursue. It is our heartfelt hope that the memories they acquire during the Programs inspire them to advocate respect for cultural heritage wherever they encounter it. We also hope that they will continue to both make use of and contribute to the network of graduates of the Programs of which they are a part.

Executive Director and Head of Centre for Archaeology and Heritage
Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures
Norwich, UK

Professor Simon Kaner



2 ウインタープログラムの概要

実施期間	● 2020年2月5日(水)～14日(金)
内 容	● ●博物館・美術館等の見学 大英博物館、ロンドン博物館、ウィルトシャー博物館、ピット・リバーズ博物館、アシュモレアン博物館、ソールズベリー博物館、アンドーヴァー鉄器時代博物館、ラッセル・コーツ美術館・博物館 ● ●史跡等の見学 ミトラス神殿遺跡、ストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡、ソールズベリー大聖堂、ウィンドミル・ヒル、シルベリーヒル、ダリントン・ウォール、ウッド・ヘンジ、オールド・セーラム、ダンベリー・ヒルフォート ● ●歴史的都市の見学 ロンドン、オックスフォード、ソールズベリー、サウサンプトン、アンドーヴァー、スウィンドン、ボーンマス ● ●講義・実習等 ・ ロンドン大学UCL考古学研究所、サウサンプトン大学考古学研究室の訪問 ・ 大英博物館、ロンドン大学、ストーンヘンジ、ウィルトシャー博物館、サウサンプトン大学、ラッセル・コーツ美術館・博物館での歴史遺産に関する講義 ・ ウェセックス・アーケオロジーでの考古学実習 ・ ヒストリック・イングランド・アーカイヴの見学
担当講師	● アンディ・ハッチソン(セインズベリー日本藝術研究所 上級研究員) サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所 総括役所長 兼 考古・文化遺産学センター長)
募集方法等	● 2019年11月に東京大学文学部のwebsite等で告知、募集開始 参加申込者に対し書類選考の後、12月に申込者に通知。
受講者	● 東京大学学部前期および後期課程学生5名 セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生5名
支援者 (プログラムに同行)	● 國木田 大(大学院人文社会系研究科 特任助教) 加藤 淳(大学院人文社会系研究科 事務部・事務長) 沖野加代子(大学院人文社会系研究科 事務部・教務係)

3 プログラム実施内容



ストーンヘンジにて

プログラムの前半では、ロンドンに滞在しながら、同市の歴史文化遺産の多様性の理解に努めた。プログラム初日に受講者は大英博物館に現地集合し、その後数日かけてさまざまな博物館・美術館、史跡などを見て回った。大英博物館では学芸員が応接してくれ、普段は目にすることのできない貴重な遺物を直接手に取りながら学習した。その後、バスを使って、オックスフォードを経由して、イングランド南西部のソールズベリーに移動した。プログラムの後半では、拠点をソールズベリーに移して、ディヴァイジーズ、サウサンプトン、アンドーヴァー、スウィンドン、ボーンマスの大学、博物館・美術館、史跡等で歴史文化遺産について学習した。セインズベリー日本藝術研究所センター長のサイモン・ケイナー博士とは、ディヴァイジーズで合流して、歓迎の言葉を頂いた。ソールズベリーの宿泊所であるセラム・カレッジでは、歴史遺産に関する講義の受講や、グループ討論によるレポートの作成も行った。

受講者たちは、プログラムで感じた意見等を発表し、交流を深めた。議論の内容は、博物館の学術的・社会的役割の違いや、文化遺産の歴史的価値や背景、展示・解説方法、日本と英国の新石器時代における比較等、多岐にわたっていた。東京大学からの参加学生は英国の学生と食事と宿泊を共にしながら親交を深めた。

● 博物館・美術館での見学実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であるため、博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。大英博物館では収蔵資料に関する講義・実習を行った。ニール・ウィルキン学芸員指導のもと、歴史資料（青銅器等）の取扱い方法等を、実物の資料に接しながら学んだ。また、東京大学と英国の学生二人一組で展示を回り、日本ギャラリーでは東京大学の学生が英国の学生に展示解説を行った。オックスフォード



大英博物館で顔合わせ



大英博物館学芸員による講義・実習

3 プログラム実施内容



ラッセル・コーツ美術館・博物館にて

のピット・リバーズ博物館でも、二人一組で展示品を観覧し、世界の文化の多様性について議論を行った。ロンドン博物館では、ロンドンの歴史遺産について学んだ。

プログラム後半では、ソールズベリーを拠点にして、ディヴァイジーズ、アンドーヴァー、ボーンマスの博物館・美術館を積極的に訪問した。ディヴァイジーズのウィルトシャー博物館では、ストーンヘンジに関連した考古遺物について素養を深めた。アンドーヴァー鉄器時代博物館では、英国の鉄器時代の生活様式やヒルフォートについて学習し、後に見学するダンベリー・ヒルフォートに関しての知識を得た。ボーンマスのラッセル・コーツ美術館・博物館では、明治時代に収集された日本のコレクションに関して、学芸員の方から解説して頂き、英国における日本文化の受容のあり方について議論を行った。この他に、オックスフォードのアシュモレアン博物館、ソールズベリー博物館も見学した。各博物

館・美術館における展示方法は多種多様で、受講者は学芸員との議論を通じて、その意図や方針等をその都度確認し、知見を広げることができた。

● 史跡等の見学

歴史を学ぶ上では、博物館・美術館資料だけではなく、実際の地理的背景との結びつきを考慮することが重要になる。そのような認識に基づき、イングランド南西部の歴史文化遺産を訪問する機会を積極的に設定した。ウィルトシャー州に所在する世界的に著名なストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡を訪問し、新石器時代の文化や生業、ランドスケープ等について学んだ。ストーンヘンジでは、イングリッシュ・ヘリテージの学芸員、セインズベリー日本藝術研究所センター長のサイモン・ケイナー博士の特別な計らいにより、一般の観覧時間前にストーンヘンジを見学できた。間近で見る巨大なモニュメントに一同大興奮で、巨石の隙間からのぞく幻想的な朝日も格別だった。また、ストーンヘンジ周辺のダリン



ロンドン博物館の見学



早朝のストーンヘンジ

トン・ウォール、ウッド・ヘンジ等も散策し、当時のランドスケープに思いを馳せた。

エーヴベリー遺跡では、暴風雨の中ではあったが、サウサンプトン大学のジョシュア・ポラード教授の解説のもと、遺跡の研究史や最新の研究成果について学んだ。遺跡周辺のウィンドミル・ヒル、シルベリーヒルもあわせて見学し、新石器時代の歴史文化遺産について理解を深めた。また、これらの史跡では、訪問者へのアプローチ方法や展示物の構成等の違いについての議論も行った。

新石器時代の史跡以外では、鉄器時代のダンベリー・ヒルフォート、ソールズベリーの中世のオールド・セラム、ソールズベリー大聖堂を見学した。ソールズベリー大聖堂でも、ケービル・ヘリテージのグラハム・ケービル博士の特別なご厚意により尖塔内部の観覧を行うことができた。狭い通路や屋根裏の散策、大聖堂の時計を間近で見ることができ非常に貴重な体験となった。今年度は、主に先史時代を中心としたプログラムであったが、このような中世の史跡を見学する機会もあり、歴史文化遺産における宗教や建築分野に関する知見も多く得ることができた。

この他に、ロンドンではミトラス神殿遺跡等を訪問し、英国の歴史について理解を深めた。受講者間では、夕食後に訪れた博物館・美術館や史跡について議論を交わし、歴史文化遺産の意義を考える機会を持った。議論した内容は、レポートとしてまとめ、本報告書内に掲載している。

● 歴史文化遺産の講義

大学、博物館・美術館、史跡において、担当講師の方から直接解説を伺い、体感的に歴史文化遺産を学んだ。調査研究を行った方からの直接の解説は、最も意義のある情報であり、歴史文化遺産を学ぶ上で必要不可欠である。

大英博物館ではニール・ウィルキン学芸員の青銅器に関する講義、ウィルトシャー博物館ではデーヴィッド・ドーソン館長から博物館運営や歴史文化遺産に関する講義を受けた。また、ストーンヘンジのビジターセンターでは、イングリッシュ・ヘリテージのスーザン・グリーン学芸員、ヘザー・セバイア学芸員から、歴史文化遺産の管理と活用、ストー

ンヘンジの研究史に関して教わった。この他に、ラッセル・コーツ美術館・博物館では、日本コレクションの収集経緯や、その活用について解説して頂いた。

ロンドン大学とサウサンプトン大学では、考古学研究室を訪問した。ロンドン大学では、マイク・バーカー・ピアソン教授に、ストーンヘンジの研究に関して、最新の研究成果を教えて頂いた。サウサンプトン大学では、ジョシュア・ポラード教授に、エーヴベリー遺跡やその周辺の新石器時代モニュメントに関する研究成果をご紹介頂いた。同大学では、水中考古学の研究室において、最新のVR技術を体験し、その活用法についても講義を受けた。また、両大学では研究環境や資料の収蔵状況も見学させて頂いた。保管されている研究資料を間近で観察することでより理解を深めることができ、貴重な機会となった。

この他に、プログラムに同行されていたセインズベリー日本藝術研究所の内山純蔵博士、新潟県立歴史博物館の宮尾亨学芸員から、夕食後にレクチャーを受ける機会もあった。内山博士には、秋田県の大湯環状列石に関する講義、宮尾学芸員には火焰土器と縄文モニュメントに関する講義を受けた。英国の学生にとっては日本の歴史文化遺産を直接学ぶことができる貴重な機会となり、熱心に耳を傾けていた。東京大学の参加学生が、講義内容を英語に翻訳して英国の学生に説明を行う一幕もあった。

● 歴史文化遺産に関する体験・見学実習

歴史遺産を知るためには、実際的な活動を見学して学ぶことが効果的である。ウェセックス・アーケオロジでは、発掘調査で得られた考古学資料が、その後どのように記録・保管されているのかを学んだ。ウェセックス・アーケオロジは、日本における埋蔵文化財センターとほぼ同様の活動を行っている民間機関である。発掘された考古遺物の洗浄・保管・記録作業を、実際に見学しながら学習した。考古学の活動に初めて参加する学生も多く、歴史遺産を体感する貴重な経験となった。

ヒストリック・イングランド・アーカイヴでは、英国の写真、フィルム、書籍、絵画資料等がどのように保管・活用されているのかを学んだ。フィルム

3 プログラム実施内容

資料は、温湿度が管理された収蔵庫に保管されており、その取出し方や閲覧方法も実演して頂いた。また、1725年に発行されたストーンヘンジに関する貴重な書籍も、実際に手に取って観察することができ、アーカイヴ資料の重要性を実感することができた。

ストーンヘンジのビジターセンターでは、実際に展示内容を考える実習も行った。ストーンヘンジをはじめとした先史時代の歴史文化遺産を、来館者にどのように見せるかを議論した。その後、受講者は実際のビジターセンターの展示内容を観覧し、その展示構成や導線の設定に感心することとなった。



サウサンプトン大学考古学研究室でVR体験

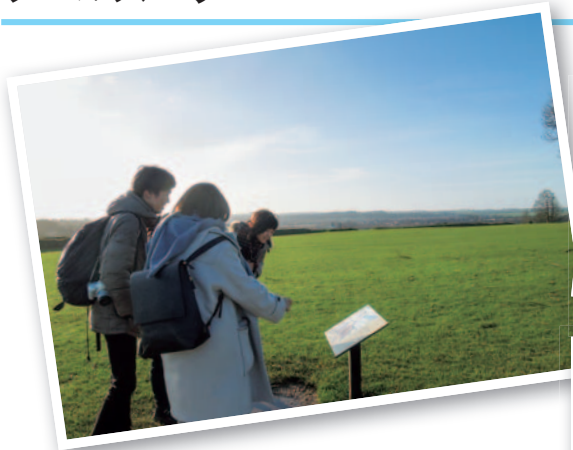


エーヴベリー遺跡近辺のパブで、サイモン・ケイナー所長と

ロンドン・オックスフォード



ソールズベリー



4 受講者レポート ①

■ Thematic Report

Alexandra Kelly, Daniel Dodd, Erina Mameuda, Fruzsina Farkas, Joseph Hatton

The Winter Programme has offered many opportunities to visit various heritage institutions and archaeological sites which allowed us to learn how experts contribute to the understanding of archaeology.

Furthermore, we got to know more about Japanese archaeology and culture, and long-standing connections between the two nations that have been maintained today by the Sainsbury Institute.



ウィルトシャー博物館長による展示解説

Museums in the UK try to keep the narrative as factual as possible; however, due to the nature of the work, facts cannot always be determined, leaving exhibitions open to a certain degree of interpretation.

A concurrent theme present in heritage work relates to how preservation retains our link with the past and allows us to better understand what we started out with and how far we have come as a species. Many cultural heritage organisations attempt to engage with the public effectively in order to deliver the knowledge and the fascination of archaeology, and various methods are being used including visual representations, models, and reconstructions. In addition, the talks concerning museum management have

presented issues that are abundant in heritage conservation: for instance, museums such as the Wiltshire Museum are undergoing financial difficulties caused by the reduction of funding from the County Council, meaning they have to rely on private donations and charging the visitors. Meanwhile at Wessex Archaeology, it was interesting to find out that there were multiple ways to be involved in archaeology as a profession other than becoming a fieldworker or an academic researcher, such as 3D design, illustration, surveying (e.g. GPR, using the most advanced equipment). It was a good opportunity to understand the reality which the heritage sector faces, discuss our ideas to improve such situations among the fellow students and think about the future of archaeology.

One of the main purposes of the programme other than to learn about heritage conservation was to connect with Japanese students in order to understand the similarities and differences between Japanese and British culture and heritage. Growing up in the UK there aren't many opportunities to learn about Japanese culture and history, especially in schools. Curriculums tend to



ウェセックス・アーケオロジー見学

have a very euro-centric focus and mindset, rarely taking time to explore or even introduce more distant societies. Oftentimes we find that both our own knowledge on far away cultures and that of those around us may be based upon stereotypes and misconceptions.

The talks by Prof Uchiyama on Japanese stone circles and Prof Miyao on flame pots were really engaging and have changed our perspective on and removed our preconceptions about Japanese history. This sparked an interest in areas of history we previously didn't even know existed such as Japanese Pre-history and the Jōmon period.



内山博士による大湯環状列石の講義

We found the designs of the middle age Jōmon pots to be particularly striking. The seemingly complex shapes and lines follow a number of rules similar to modern day Japanese forms of art such as Haiku poetry, allowing for complex variations in design but



宮尾学芸員による火炎土器と縄文モニュメントの講義

a distinct uniform style. This has not only changed our perspective of Prehistoric Japan but of the entire Prehistoric world.



アシュモレアン博物館にて

Through talking with heritage professionals and experts in specialised fields of archaeology and history (and even being allowed to go inside Stonehenge), we have been introduced to an in-depth narrative of prehistoric monumentality in the two countries. For example, it was fascinating to see how major changes in Prehistoric (Neolithic - Bronze Age) Britain mirror those in Prehistoric Japan. The Ōyu stone circles dating to the late Jōmon period (2000 - 1500 BC) are contemporaneous to the last stages of Stonehenge, and have many similar features; for example, both are made up of multiple concentric circles and set up in relation to the winter and summer solstice. They also had similar demographic contexts, with a decrease in population around the



ストーンヘンジ付近にて

4 受講者レポート ①

time of monument building that would suggest they were reactions to a time of distress in both countries. Similarities can also be found between the burial mounds of the Kofun period and the round barrows near



ストーンヘンジ・ビジターセンター

Stonehenge, as although they have a different shape and date, they had the same purpose: to remember and revere ancestors by altering the landscape. These customs also had a sudden end when a more “developed” culture migrated in from the continent, which also highlights the importance of geographical location and the environment in studying prehistoric peoples. Despite there never being a direct connection between Britain and Japan in prehistory, this shows that monumentality and the observation of heavenly bodies are universal concepts that are inherent to the human condition.

British and Japanese archaeology also have

had an intertwined history. The main figure is William Gowland who - despite having no formal archaeological training - was a pioneer in his work both on Stonehenge and Japan's Kofun period (3rd - 7th c. AD). He lived in Japan for 16 years and during that time, he excavated numerous burial mounds and his personal collection contributed significantly to the Japanese collection at the British Museum. After he returned to England, he raised Stone 22 of the Sarsen Circle of Stonehenge after in 1901; as well as producing the most detailed account of excavations of the time. Previously, we had no idea that British and Japanese archaeology have had such a close relationship and it was a privilege to be part of that through this programme.

Human life was rich with interconnectivity and cultural exchange even from some of the earliest phases of humanity, and the course allows one to recognise the degree of commonality between our experiences in such a connected, globalised world, and the expanding horizons of prehistoric life. Many people may perceive such intertwining/enmeshing of distant lives as a uniquely modern phenomenon, whilst seeing the prehistoric world as closed off and insular, but the sites and museums we visited, and the lectures we were given the chance to attend, showed clearly how important the



日英学生同士で意見交換
(ピット・リバーズ博物館)



ロンドン博物館の展示品



ソールズベリー博物館見学

ability to move and share ideas was to prehistoric peoples. The museums and exhibits we visited often highlighted this within the collections they showed - the Museum of Salisbury, despite focusing on one specific locality of Britain, was able to clearly demonstrate the extent of movement of people and cultural transfer that existed even in prehistory, and was likely a fairly regular aspect of life. Our exploration of the development of the Stonehenge monuments and other sites in the landscape highlighted the role of migration and community in the lives of those who built and lived around Stonehenge. The nature of these migrations may not always be clear to researchers - the number of people involved, the intentions behind them, the degree of replacement or cooperation - but it constantly provokes questions and rethinking of the way we perceive the world. The frequent movements and influence of different groups of people clearly had an impact on the way that communities chose to represent themselves and interact, which we are able to read and interpret in the material record. Through our visits and discussions of the sites, we were able to examine the way people negotiated boundaries and identity in a world without modern borders and centralised governments to organise such aspects of life - using and manipulating the landscape as a way to facilitate both contact and community. The exchange of ideas and materials that we

engage in so frequently in our contemporary world has been fundamental in the most significant changes in developments in culture and lifestyle throughout the existence of humanity.



イングランド・アーカイブセンターで説明を受ける

This gradual progression or migration, transference and development of ideologies is shown through the presentation of religious practices like burials, treatment of the dead and the importance of certain artefacts or trade. Were it not for conservation and works carried out by archaeologists and heritage professionals this pragmatic link may be lost or misconstrued, leading to divergent theories with impractical explanations like William Stukeley's romanticist explanation of druidism or magic. As societies become more convoluted, the importance of our historical narrative can often be ignored or forgotten in favour of the many technological distractions available to us, but perseverance of museum and world heritage officials ensures that it remains accessible and integral, as testament to the tenacity of our ancestors regardless of language or borders.



ストーンヘンジ付近にて

4 受講者レポート ②

■ 日誌形式レポート

難波陽菜、桐谷詩絵音、高石桜、清水葉、佐野文哉

1日目—2月5日(水)

10日間のプログラムはロンドン(London)からスタート。大英博物館(British Museum)のGreat Courtに集合。イギリス側の学生5人や、事前にメールでやりとりをしていたAndy Hutcheson先生ともこの日が初対面。まず大英博物館の学芸員Neil Wilkin先生から、Room 51で、展示品のうちイギリスでストーンヘンジの時代に出土した品について解説していただいた。その後バックヤードのstudy roomに移動し、金属探知によって発掘された品について解説していただいた。出土品をガラスケース越しでなく、間近で観察したり手袋をつけて触ったりすることができる貴重な体験だった。解説は質疑応答を交えながら進んでいったのだが、イギリス側の学生の考古学に関する知識の豊富さには驚いた。その後の自由時間では、興味のあるギャラリーを各々回るなどした。夕食はレストランでフィッシュ&チップスを楽しんだ。



レストランでフィッシュ&チップスを楽しむ

2日目—2月6日(木)

地下鉄に乗り、ロンドン博物館(Museum of London)へ。入ってすぐの先史時代の展示と、その後のローマ帝国時代や中世時代の展示との比較を試みながら、各時代の展示をじっくりと見学した。博物館内のカフェで昼食をとったのち、ロンドンのシティ街を通り抜けてロンドン・ミトラ教神殿遺跡(London Mithraeum)へ。建物の地下に、ミトラ教神殿の遺跡を復元しており、光や音、霧を活用した展示が行われていたのが興味深かった。次はスカイガーデン(Sky Garden)へ。天気も良く、ロンドンの街並みが綺麗に一望できた。

1日目に訪れた大英博物館に戻り、イギリス側の学生と日本側の学生2人1組で、あるテーマに沿った展示品を巡っていくというツアーを実施。日本ギャラリーの展示品をイギリス側の学生に説明するというミッションもあり、なかなか大変だった。その後は徒歩でユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)考古学研究所へ向かう。ストーンヘンジを長年研究しているMike Parker Pearson教授から、ストーンヘンジについて

レクチャーを受けた。最後は中華料理店で夕食。この日は盛りだくさんのスケジュールに加え、夜が遅くなってもなかなか夕食が終わらなかったこともあり、やや疲れて終わった。



スカイガーデン展望台から眼下をのぞむ

3日目—2月7日(金)

実はまだ学生同士ちゃんとした自己紹介をしていなかったため、朝ホテルのレセプションで自己紹介の時間を設けることに。バスで2時間弱かけてオックスフォード(Oxford)まで移動。午前中はピット・リバーズ博物館(Pitt Rivers Museum)を見学。コレクションが所狭しと並んだ館内には圧倒された。これまで見学してきた博物館とは異なり、時系列的な展示ではなく民族誌的な展示だったのが印象的だった。午後はアシュモレアン博物館(Ashmolean Museum)へ。2グループに分かれてそれぞれ学芸員の方に解説してもらいながら館内の一部を見学したのち、各々見学。その後の自由時間では、ショッピングに出かけたり、別の博物館へ足を伸ばしたり、思い思いにオックスフォードを楽しんだ。夕食は雰囲気溢れるパブで、これがイギリスのパブ初体験という学生もいた。夕食後はスーパーマーケットに寄って買い出しを行い、ソールズベリー(Salisbury)のホテルまでバスで移動した。



ロンドン大学マーク・パーカー・ピアソン博士によるストーンヘンジ特別講義

4日目—2月8日(土)

この日は予定を変更して、博物館巡りの一日だった。午前中はソールズベリー博物館(Salisbury Museum)を見学した後、ディバイジーズ(Devizes)へ移動。ここでの昼食ではじめてSimon Kaner先生と対面した。午後はウィルトシャー博物館(Wiltshire Museum)を見学。David Dawson館長からは、展示についてだけでなく、午前中に見学したソールズベリー博物館を含む全4館の博物館で協力体制をとっていることなど博物館の運営についても伺った。明日以降に予定されている屋外での遺跡見学に際し悪天候が予想されることから、急遽ソールズベリーにあるアウトドア用品店で防水ジャケットや防水シューズを購入することに。閉店時刻が迫る中、無事買い物を済ませることができた。



サイモン・ケイナー所長との歓迎ランチ

5日目—2月9日(日)

珍しいことに、4日目まで雨が全く降らず、天候に非常に恵まれていた本プログラム。しかしそれもここまで。朝から雨の降る中、エイヴベリー(Avebury)の遺跡を歩きながら見て回ったのだが、激しい風と雨が吹きつけ、足元は泥でぬかるんでいるような状況。Joshua Pollard先生が解説してくださる声も全く聞こえず、先生方についていくのがやっとの状況。後で伺ったところによると、どうやら過去のプログラムと比較



悪天候のエイヴベリー遺跡にて

しても「一番悪い」天候だったとか。見学を早めに切り上げ、近くのパブに避難。暖かい室内でコーヒーや紅茶を飲みつつ、テーブルに地図を広げて先ほどの解説の続きを聞くことになった。途中Silbury Hillの見学を挟みながらソールズベリーへと戻り、プログラム後半で連泊するSarum Collegeにチェックイン。夕食後にはミーティングルームで、現在イギリスで環境考古学の研究をされている内山純蔵先生が、日本の縄文時代の湯環状列石についてレクチャーしてくださった。

6日目—2月10日(月)

日の出前の早朝に出発。ストーンヘンジ(Stonehenge)とその周辺の遺跡の見学へと向かった。まずは最も有名なストーンヘンジへ。特別にストーンヘンジサークルの中に入れていただき、English Heritageの方に説明していただきながらストーンヘンジを間近で見学することができた。見学の途中には東から太陽が昇ってきて、非常に美しい光景を見ることができた。ストーンヘンジ・ビジター・センター(Stonehenge Visitor Centre)で朝食をとったのち、education roomに移動してレクチャーを受けた。まずは博物館のインタープリテーションについて。ビジターセンターの館内展示を考えてみるというワークもあった。学生数人が1グループとなって、それぞれどのような館内展示が良いか議論し、実際の見取り図に絵や文で説明を書き込んでいきプレゼンを行った。その後実際にビジターセンターを見学した。その際、今年(2020年)秋にビジターセンターで企画展“Stonehenge & Jomon Japan”(仮題)が予定されていることもお聞きした。

再び屋外に出て、ストーンヘンジの周辺の遺跡を見学。羊が放牧されているような平原を実際に自分の足で歩きながら遺跡を見て回ることで、遺跡の位置関係や大きさが実感できた。ビジターセンターに戻り昼食後は再びレクチャー。今度はストーンヘンジ保存の歴史について、ストーンヘンジと月の関係についてだった。夕方にビジターセンターを発ち、Sarum Collegeへ。夕食後にはミーティングルームで、新潟県立歴史博物館の宮尾亨先生が、縄文時代の火焰型土器についてレクチャーしてくださった。イギリス側の学生にも講義の内容がわかるよう、日本側の学生が日本語から英語へと通訳をする(!)場面もあった。



ストーンヘンジ・ビジターセンターにて展示企画作成に挑戦

4 受講者レポート ②

7日目—2月11日(火)

プログラムの予定を変更したため、午前中に自由時間が生まれた。先生方がミーティングルームにストーンヘンジや縄文時代の遺跡についての本など、レポートの参考文献となりそうな書籍をたくさん用意してくださったため、各自ミーティングルームでレポートの構想を練ったり執筆に励んだりした。

その後、宿泊しているSarum Collegeの目の前にあるソールズベリー大聖堂(Salisbury Cathedral)を見学。Graham Keevill先生の説明はどれも興味深かったが、昔の人々が大



ソールズベリー大聖堂前で

聖堂の壁を引っ掻いて残した文字や模様についての説明は特に印象に残った。また、普段は見学することのできない天井も見学させていただいた。ちょうど時計が午後1時の鐘を鳴らす瞬間にも居合わせることができた。

午後はサウサンプトン大学(University of Southampton)考古学研究室を見学。黒海に沈んでいる船や動物の遺骸を研究している研究室などを見学させていただいた。黒海に沈んでいる船の様子はVRで体験することができるようになっており、希望する学生はVR映像の中で、船の中を歩いたり遺物を手に持って観察してみたりしていた。またOld Sarum(オールドセイラム)の遺跡の発掘調査の結果とAvebury地域について、それぞれレクチャーを受けた。その後研究室では、研究者と学生との歓談の席が設けられ、イギリスで発売されている日本酒をみんなで飲むなどして楽しんだ。



ソールズベリー大聖堂の見学

8日目—2月12日(水)

前日の夜にイギリス側の学生の一人が怪我をしてしまうというアクシデントがあり、この日は学生9人でのプログラムとなった。朝はOld Sarumの遺跡を見学。Andyに説明してもらいながら、Old Sarum城(残念ながら10時オープンのため中には入れなかった)、前日に見学したソールズベリー大聖堂がもともとあった跡地などを見て回った。その後Wessex Archaeologyを訪問。地球物理学の機械による測地の様子や、発掘した品を分類・管理する部門、3Dモデルを作成するグラフィック部門、環境考古学、といった各部門を見学し、業務の内容を丁寧に説明していただいた。またイギリス考古学とストーンヘンジの周辺遺跡についてもレクチャーを受けた。

午後はアンドーヴァー(Andover)まで移動し、アンドーヴァー鉄器時代博物館(Andover Museum of the Iron Age)を見学。本プログラムは先史時代を主眼に置いているが、この博物館ではその名の通り鉄器時代の展示を行っており、新しい知見を得ることができた。その後Danebury HillfortをAndyに説明してもらいながら見学した。

9日目—2月13日(木)

スウィンドン(Swindon)まで移動し、Historic England Archiveを見学。ここでは写真など1200万点以上の資料を所蔵しているという。ストーンヘンジなどに関する貴重な写真や本を実際に手にとってみる時間もいただけた。“Wagamama”という店名の日本料理店で昼食。ラーメンが人気の商品だった。日本では見ない具も入っていたが、食べてみると全体的に日本のものより味があっさりしていておいしいという意見が多かった。午後はラッセルコート美術館&博物館(Russell-Cotes Art Gallery & Museum)へ。Russell-Cotes夫妻が日本旅行時に持ち帰ったものを含む日本の美術品・工芸品が多数展示されており興味深かった。また内装にも日本の文物などが多く取り入れられており、日本文化の受容について考えさせられた。この建物はもともとホテルとして作られたこともあり、建物からの眺望は素晴らしかった。ホテルで夕食後、Simonからプログラムを締めくくるお話があった。その後一部の学生はパブへ行き、最後の夜を楽しんだ。



ラッセル・コート美術館・博物館前で

10日目—2月14日(金)

日本側の学生はロンドンまでバスで移動すると思っていたのだが、実際は現地解散だった。朝、宿泊していたSarum Collegeの前でイギリス側の学生2人とはお別れ。その後日本側の学生5人とイギリス側の学生3人は電車でロンドンまで移動することにした

電車で1時間半ほどかけ、ロンドン・ウォーターloo(Waterloo) 駅に到着。別れを惜しみつつ、帰宅の途につく者、延泊のためホテルに向かう者などに分かれた。

(佐野文哉)



5日間を過ごしたセラム・カレッジ前で

4 受講者レポート ③

■ テーマ別レポート

難波陽菜、桐谷詩絵音、高石桜、清水菜、佐野文哉

1. 私たちは歴史とどう関わるのか

今回のプログラム中、私たちはいくつもの博物館や遺跡を訪れ、数千年前の人々がどのような暮らしをし、何を作り上げ、何を信じていたのか等について考える機会を得た。もちろん多くの場合、それらへの明確な答えはわからない。当時の人々が生存している者がいない以上、当時の状況を少しでも正確に把握するためには解釈を介在させるほかない。この解釈の最前線を行なっているのがきつと考古学であり、その解釈を選別し、私たちに分かりやすく伝えようとしているのが博物館や歴史保全を目的とした組織(イギリスで言えばEnglish Heritage等)なのであろう。両者の取り組みがいかに魅力的で、同時に労苦を伴うものかということは、10日間のプログラムを通して少し分かったような気がした。というのも、イギリスで訪れた博物館の多くは、鑑賞者に単なる情報を与える場ではなく、実際に当時の人々がどのような場所でどのように生活を営んでいたのかを「体感」させる工夫が随所に凝らされていたのである。展示室の壁や床を使つての風景の再現、実際に中に入れる住居の再現、果ては目の前で実際に儀式が行われているかのような演出など、その取り組みは様々であった。そしてそのような展示に触れる内に、自分には次のような疑問が浮かんだ。「当時の人々が作った遺構には、もちろん祭祀等の文化的に重要な意味づけはあるにしても、彼らの存在そのものに関するメッセージは含まれていないのか」というものだ。残念ながら先史時代の遺跡では、自分の知識ではそのような部分まで検証することはできなかった。一方で、そのメッセージを感じられるような経験もできた。ソールズベリー大聖堂に行った際、尖塔の内側の壁にいくつもの名前が彫られているのを目にした。「私がこの部屋を掃除した」という文言付きの名前もある。彼らが名前を彫ってから優に百年は経過しているため、それらは立派な「歴史的落書き」であり、同時に私にとっては、「自分がその日そこに存在したのだ」という、彫った人物からのメッセージのように感じられた。もしかしたら彼らのうちほとんどの人はそうは考えていなかったかもしれない。しかし一人でもそう考えてくれたら、私はその人からのそのメッ

セージを受け取ったことになるのでは無いか、という不思議な感覚にとらわれた。イギリスの博物館で得た歴史の「体感」という経験のおかげで、歴史を学ぶ際、単に知識を吸収するのではなく、当時の人々のリアルな日常に思いを馳せる姿勢が得られたように思う。

ストーンヘンジのビジターセンターには、ストーンヘンジと観光客が写った写真が何枚も飾られている部屋がある。最近の写真もあれば、1900年代に撮られた写真も数多くある。洋服や持ち物、文化や時代といった違いを感じながらそれらの写真を見ていたが、不意に「ストーンヘンジを鑑賞していた人々を鑑賞する」という体験を通して、「自分自身もストーンヘンジの歴史に組み込まれていっている」という事実を突きつけられたような気がした。今の私たちも、100年後にストーンヘンジを訪れた人にとってはストーンヘンジの歴史を構成する(してきた)要素となるはずである。そしてこのことは、私たちがこれから築いてく歴史全般において言えることだ。私たちは、これから先(おそらく)ずっと続いていくであろう歴史の最前線にいる。そう考えると、昔の人々からメッセージを受け取ろうとすることも重要だが、後世の人々に何を伝えるのかをすることも同じように重要なはずである。そしてそれをどのように残すのか。現代には映像や写真など、極めて正確に情報を伝達する手段が溢れている。しかし「もし浸水してしまったら」「もしデータが全て吹き飛んでしまったら」などと考えると、「石に刻んでみるのもひょっとすると良い手なのかもしれない」とも思えてくるのである。

(難波陽菜)



ソールズベリー大聖堂の壁の落書き



ストーンヘンジ・ビジターセンター
観光客の写真の数々

2. 考古学的遺物は誰のものか

文化資源学的な観点から、ウィルトシャー州における遺跡およびその博物館展示について見てみたい。

印象的だったのは、Wessex Archaeologyでスタッフの方が説明してくださった、昨今のイギリスにおける考古学的調査の需要の高まりについてである。それによれば、現在のイギリスでは考古学的調査の需要が非常に高まっているが、各町・



ウェセックス・アーケオロジで説明を受ける

各集落のアイデンティティとの関わりが大きいという。つまり、考古学的遺跡が発見されれば、それは地元住民にとっての誇りとなるために、その確証を行うための考古学的調査が重要な意味を持つのである。現代において、新石器時代から青銅器時代にかけての遺跡が発見され、それが考古学的調査を経て「遺産化」されることで、その遺跡そのものとは異なる意味が地域社会の中で付与されるのである。

そして、その地域社会での誇りを形成し、または地域社会が遺跡に対してもつ誇りを効果的に外部へ伝えるプロセスで重要になるのが、博物館における「翻訳(interpretation)」である。Wessex Archaeologyでは、近年、遺跡の調査結果を受ける地域社会からの要求水準が高まっているという。つまり、かつてはスタッフは、調査し、その結果をレポートや口頭で伝えることが主な活動だったが、近年は具体的な当時の想像図やモデル製作、プレゼンテーションなど、より理解しやすい形での結果提示が求められているのだという。

この事実は、Stonehenge Visitor Centreの学芸員の話とも共通する。すなわち、世界中から訪れる広範な層にわたる観光客に対して、顧客層を想定し、行動経路を予測し、できるだけ要旨をわかりやすい形で提示できるような展示が目指されていた。また、観光客の多くが発掘された人骨の本物の展示を求めていることから、倫理的問題を考慮しても、最終的には本物の人骨を展示することを決定したという。

しかし、そこにはジレンマが存在する。専門的知識を持たない広範な観光客に対してわかりやすいCGイメージを提示するとき、厳密に考古学的調査からわかっていることのみを反映する(逆にわかっていないことについては沈黙する)という専門性との両立は、困難を伴う。わかりやすいイメージの提供は、特に「民族」の「起源」に関わる歴史研究の場合、常に「伝統の発明」や「想像の共同体」の危険が伴うだろう。

その一方で、Wessex Archaeologyのスタッフが強調していたように、考古学的調査は常に“story”を語る営みでもある。ミュージアムの展示が、専門的知識を持たない人々にとって身近に感じられないものになってしまうとすれば、学術的権威が常に内包せざるを得ない権力性の発露は避けられないだろう。例えば、大英博物館やAshmolean博物館は、専門的な予備知識がある程度必要とされる展示内容となっており、現物の展示と説明という視覚中心的な方式が取られていた。

いわば、こうした視覚による対比や分類が「近代」のミュージアムというメディアの根幹を成してきたわけだが、そこには、専門的知識を持たない人々や視覚的障害を持つ人々が疎外されてしまうという問題点も存在していた。

その意味で、「翻訳」には大きな可能性が存在する。Wiltshire博物館が力を入れる、Wiltshireのランドスケープ全体をイメージした展示室や子ども向けの体験型展示、Stonehenge Visitor Centreの手で触れられるストーンヘンジの模型や石器・鉄器の模型、そして当時の家屋の再現やボランティアによる説明などは、その代表例だろう。Pitt-Rivers博物館のモノの用途別展示は、元は近代的な発展史観に遡るとはいえ、時系列に沿った発展史観をやはり解体する可能性を秘めていると言える。

この「翻訳」をめぐる再び浮上するのが、誰のための展示なのか、という問題であり、ひいてはそれは、その考古学的遺物は誰のものなのか、という問いに接続する。あらゆる学術的営みがそうであるように、考古学的遺物を発掘し、収集し、翻訳し、展示するプロセスには、外部からその意味づけを決定するという暴力性が常に存在する。

Stonehenge Visitor Centreの学芸員が話していたように、遺跡から出土した人骨を展示することの是非には議論が存在する。そこで論点となるのは、先史時代の人間の人骨は、現代社会の中では誰の所有として位置付けられるのか、である。そして、これは人骨を展示するミュージアムのみが関係する問題ではなく、「本物」としての人骨を見たいと考え要求する、社会全体が考えることを迫られる問題でもある。その過程では、東京大学におけるアイヌ民族の人骨返還問題も、もちろん忘れてはならない。今回のプログラムは、現代社会の中でのミュージアムのあり方について、深く考えさせられる経験だった。

(桐谷詩絵音)



ストーンヘンジ・ビジターセンターにて講義を受ける

3. 展示における出土物と再現物の位置づけについて

イングランドで数多くの博物館を訪れその展示に幾度となく触れる体験は、それまで博物館について単に「貴重な文化財を見ることを目的に訪れ、それらと一対一で向き合うことにより新たな知見や発見を得る場」としてしか認識していなかった私に「博物館(あるいは遺跡での展示)のあり方とはそもそもど

4 受講者レポート ③

ういうものなのか」という問いを提起した。

私が従来博物館のイメージとして想定していたのは、極めてシンプルな背景のもとに出土物が主役として存在感を放つ展示構成だった。イングランドでは大英博物館やアシュモレアン博物館のような大規模かつ広範な時代・地域を扱う博物館にこのような構成がみられたが、日本では小規模な博物館もこのような展示方法をとっていることが多いのではないだろうか。一方で今回訪れた博物館の中には、そうした出土物のある種の主体性が展示空間を構成しているとは必ずしも言い難い展示が数多くあった。

金融街の地下に位置するミトラ教神殿の解説は、儀式が再現される神殿遺跡横の照明の暗い部屋(遺跡見学は20分間の交代制であるため、交代を待つ部屋でもある)での3つのテーマに沿ったタッチパネルと、地上階でのiPadによるものにとどまっていた。神殿周辺の出土物は地上階エントランスのガラスケースの中にショーウィンドウのように展示され、見上げなければかなり見づらいものもあった。スペースの制限を鑑みても、展示はミトラ教神殿の神秘的な雰囲気の再現に重点が置かれ、出土物の展示は重要視されていないようだった。

アンドーバー鉄器時代博物館でも出土品そのものの展示は小さなショーケースによるものが多い一方、絵・フィギュアによる当時の生活の再現に大きなスペースが割かれ、当時の住居を模した茅葺き屋根や石壁が順路に配される構成となっていた。またストーンヘンジなどの出土物を扱うウィルトシャー博物館でも、出土物の展示の背景に遺跡や出土地の写真・再現図が用いられ、展示物の時代の変遷に合わせて床の模様などの装飾も変化するといった工夫が施されていた。

以上にあげた博物館・遺跡は特定の時代やテーマに沿った小規模な博物館であるが、ここでの展示は展示物そのものと見学者を直接対峙させることと同様、もしくはそれ以上に見学者が当時は追体験できるような展示のあり方に主眼が置かれているように思われる。当然遺物から再現される当時の風俗には様々な解釈があり、絵や像による具体的な描写は必ずしも厳密に当時を再現しているものとは言えない。しかしこうした展示の手法は、出土物と解説だけでは想像しづらい当時のイメージを子どもや初学者を含む見学者に喚起し、その時代に対する彼らのさらなる探究心を掻き立てることにつながり、結果として彼らをより深い学びへ誘うものではないだろうか。

(高石桜)

4. イギリスの博物館

プログラム中、私たちは大英博物館を筆頭としてたくさんの博物館を訪れた。そこで、イギリスの博物館について、よく見かける日本の博物館での展示と比べて特徴的だと感じたことを述べる。

私がかつても驚いたのは、研究者、博物館に関係する人に関する展示がなされているという点である。Museum of Londonでは、先史時代のコーナーで発掘された石や骨に混じって、同じガラスケースの中に研究書が展示されていた。Ashmolean Museumでは、コレクションの一角を作ったエヴァンズ一族(ミケーネ島のクノッソス宮殿を発掘したサー・アー

サー・ジョン・エヴァンズもその一員である)の大きなパネルが複数展示されていた。写真 1は、Wiltshire Museumにある、ストーンヘンジとAveburyをフィールドとした考古学者William Cunningtonの肖像画と説明パネルである。



写真 1

また、発掘者の個人名が出ていることにも驚いた。写真 2はWiltshire Museumで展示されていた壺と石斧である。Maud and Benjamin Cunningtonによって1926-28年に発掘されたとプレートに記載されている。日本の博物館では、たとえば「○○という団体が△△というプロジェクトを行う中で発見された……」のような説明があったとしても、このような普通の一展示品にまで、しかも発掘者の個人名を記載する例はあまり見ないのではないかと。

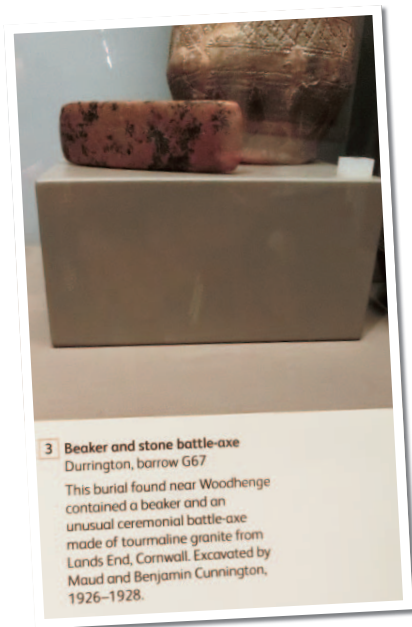


写真 2

また、折りたたみ式の椅子が置いてある博物館が散見されたのもおもしろい。Pitt Rivers Museumでは、スーパーマーケットのカートにも似た折りたたみ式の椅子を若い女の子たちが引っ張っていったし、Ashmolean Museumでは分厚いカタログが専門書のような本を片手に、じっと一つの展示品の前に座っているおじさんがいた。

このような点から見ると、イギリスの博物館は学問性が高いように感じられる。

しかし一方で、ビジュアルが凝った展示、体験型の展示が多いのも特徴なのである。Salisbury Museumでは、展示室にいくつもある扉を開くと、それぞれに模型が入っているという仕掛けがある。Wiltshire Museumでは、写真 3 のような中に入ることでできる石室のレプリカを見た。これらは多分に子どもに訴えかけるものである。



写真3

同じように、Museum of Londonでは子どもに思考を促すような質問プレート、Museum of LondonとAndover Museumではその時代に入り込みやすくなるような詩や文学作品の一部がパネルになっているのが見られた。Museum of Londonに関しては、最近学習要領に先史時代が組み込まれたということで、児童にとっても受け入れやすい展示にしているのだろうと聞いた。実際、何組か校外学習に来ているような小学校児童らしき集団がいた。

イギリスの博物館は、学問性を備えていると同時に、学問のそば口に子どもを立たせるという役割も果たすことができているように感じられた。

(清水葉)



アンドーヴァー鉄器時代博物館の自由スペース

イングランドの冬

五回目となる文学部ウインター・プログラムは、今回も無事終了することができた。たまたまブレグジット直後のイギリスというタイミングであったので、若干構えるところもあったが、杞憂であった。

人文社会系研究科・文学部は、英国セインズベリー日本藝術研究所との間で部局間協定を締結して、海外の学生と直接交流しながら国際交流の実体験を積む学部学生向けの特別教育プログラムを平成26年度から実施している。夏と冬の2回、それぞれ約2週間にわたるプログラムを日本とイギリスの地で実施してきた。本プログラムは、主として考古学・美術史・文化資源学等に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら国際交流の実を体得してもらうことを主眼としている。

5年目ということで、これまでの交流の成果や方法等について互いに議論し、再度検討をおこなった結果覚書を修正して、今回の冬のプログラムから、少しずつ内容の改善を試みることにした。東大の学部生5名とセインズベリー研究所が選抜した5名の学部生という参加メンバーには変更はないが、実施期間を従来よりも短縮し、2月5日から14日の10日間とした。今年も多く多くの遺跡や歴史的建造物・都市、歴史遺産、大学考古学研究室、博物館・美術館等を訪問したが、単なる見学にとどまるのではなく、実際に展示や設備を企画し運営している学芸員たちの生の話を聞き、美術館や博物館の運営方法、課題等について議論を交わし、ともに考えることに重点を置くように心がけた。

プログラムは、いつもの通り5日午後2時に大英博物館入り口にあるギャラリーに現地集合する形で開始された。大英博物館での青銅器時代の実物資料を用いた収蔵資料の扱い方に関する講義と実習を皮切りとして、ロンドン大学やサウサンプトン大学の考古学研究室を訪問し、あわせてオックスフォードでは、アシュモレアンやピット・リヴァースといった世界的にも著名な博物館を見学した。こうした博物館の見学では、日英の学生二人1組で回ってもらった。

プログラム後半は、ソールズベリーに拠点を移し、ウィルトシャー博物館（ストーンヘンジ）、アンドーバー鉄器時代博物館、ラッセル・コーツ美術館・博物館等を訪問・見学した。ストーンヘンジでは一般観覧時間前の見学という特別の計らいを受け、エーヴベリー遺跡ではサウサンプトン大学の

研究者（教授）による現地での解説を受けることができた。今回のプログラムでは新石器時代の史跡が中心となったが、鉄器時代のダンベリー・ヒルフォート、中世のオールド・セラム（ソールズベリー）、ソールズベリー大聖堂、ミトラス神殿（ロンドン）等も見学した。いくつかの博物館等では、学芸員の展示解説や博物館・歴史文化遺産の運営方法、遺跡の研究史等に関する講義も受け、討論や学生たちによる発表等もおこなった。またウェセックス・アーケオロジーやヒストリック・イングランド・アーカイヴといった専門の組織・機関では、遺跡の調査の実態や歴史資料の収蔵・保管の方法について学ぶ機会を得た。

単なる見学旅行ではなく、訪れた史跡や博物館・美術館等では学芸員・スタッフとの討論や講義、おりよく開催されていた講演会等のイベントへの参加等を通じて、英国における博物館・美術館の運営方法や展示ポリシー、歴史遺産の取り扱い等まで考える場を積極的に提供している。

本プログラムは、10日間にわたり東大生と海外の学生が寝食をともにしながら、互いに啓発し合うことを目的としているが、その成果は十分果たせたものと考えている。何よりも具体的な実体験を共有しながら行われる経験はきわめて重要で、これまで参加した東大生の大半は、プログラム終了後も参加した海外の学生との交流を続けていると聞く。プログラムの実施によって、参加学生たちのその後の視野の拡大にまちがいなく大きく貢献していると自負している。

冒頭にも記したように、この交流プログラムは5年目となり、ひとつの区切りを迎えた。2020年度からは内容を一新して、さらなる交流プログラムを実現すべく準備を開始している。新型コロナ・ウイルスの本格的な流行前というタイミングもラッキーであった。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・関係者の皆様に深謝いたします。

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

佐藤 宏之



(山上あかね撮影)

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



セインズベリー日本藝術研究所

ノーフォーク州ノリッチ



ロンドン ●

2019年度
文学部冬期特別プログラム
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2020年5月1日

印刷 ヨシダ印刷株式会社



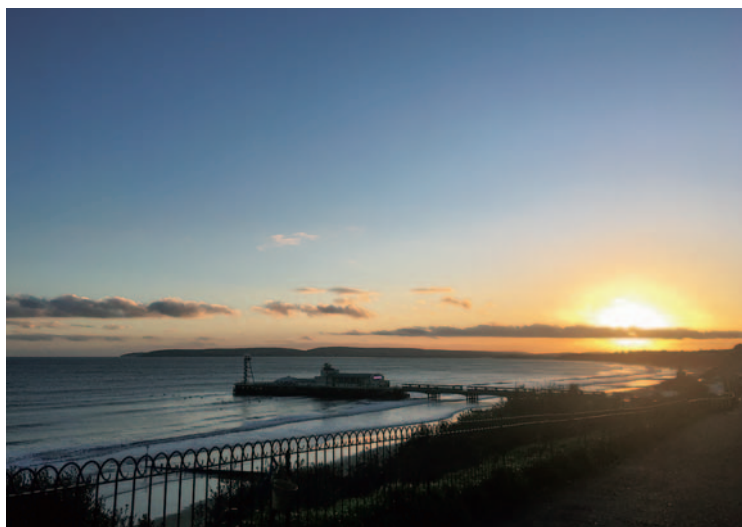




夜のオックスフォードの街並

東大文  SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>



ボーンマスの風景 (Russell-Cotes Art Gallery & Museumから)